明治大学
国際日本学部

む

国語問題

はじめに、これを読むこと。

（注意事項）

1. この問題用紙は二十二ページまである。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル（いずれもＨＢ・黒）で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
9. **解答用紙は持ちかえらないこと。**
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は六〇分である。

（マークの記入例）

良い例	悪い例
●	◉ ⊗ ○

(一)　次の文章を読み、後の問に答えよ。

a「いま、ここ」という現在は、次から次へと新たな現在へと移っていくが、これは、日常生活世界において、私が多様な位相や次元を生きている他者と出会い、つながる、もっとも力に満ちた場であり、私を中心として広がる多元的な生活世界の意味を反省する原点である。

言いかえれば、あなたという他者と向き合い、交信しようとするコミュニケーションのゼロ点でもある。私は「いま、ここ」で、そして「いま、ここ」から、世界へ立ち向かおうとする。同時に、私は「いま、ここ」で他者と出会い、さまざまな現実をつくりだそうと格闘するのである。

私があなたと対面するとき、私はあなたが発する言葉や感情、表情や動作、身体のありようを含め、すべてを感じ取る可能性に満ちている。それは、私があなたへ、同じ可能性を放出していることでもある。

Ⅰ

もちろん、あなたと直接対面したからといって、あなたのすべてが了解できるわけではない。あなたの背後には、「あなたが生きてきた、これから生きるであろう生活世界」が無限に広がっている。それをすべて感じ取り、理解するのは、不可能だろう。

シュッツの日常生活論から考えるとき、いや、そのような理論に依拠せず、私という人間が日常生きている実感から考えても、b「いま、ここ」で私があなたと出会うこと、向き合うことは、決定的に重要なのである。

では、「いま、ここ」で、私があなたとコミュニケーションすることの重要性とは何だろうか。

それは、あなたのすべてがわかるということではない。そうではなく、それは、目の前にいるあなたを理解したいが、あなたのすべてを理解できるはずもないことがわかったうえで、目の前にいるあなたを手がかりとしながら、あなたとつながりたいという、つねに現在進行形の営みである。またそれは、ある手順や段階を踏めば、あなたへの理解が完了するという「終わりのあるゲーム」などではけっしてない。こうしたことを私が実感し、あなたも実感しつつ、「いま、ここ」をどう生きるかということが重要なのではないだろうか。

Ⅱ

では、[c]私たちが「あたりまえ」に生きている日常を、どのように見直すことができるのだろうか。

私が普段他者と出会ったり、向き合ったりしている現実は、振り返る必要がない「あたりまえ」のこととして、どのように私の無意識の底へと沈みこんでいるのだろうか。そして、そのこと自体を、私はいかに問い直していけるのだろうか。

かつてつくば市に住んでいたとき、私はつくばエクスプレスを使い、よく秋葉原まで出た。快速で秋葉原まで四五分、その間、[d]車内での人びとの様子をそれとなく観察するのだが、なかなか興味深いものがあった。

電車が動きだすと、ある女性は、大きな四角い鏡を取り出し、メイクを始める。すっぴんの顔にアイシャドウを塗り、電車が細かく揺れるなかで、つけまつげを取りだして、上手につけ、カーラーで上向きにしていく。秋葉原に到着するころには、化粧は完成し、女性は何事もなかったかのようにホームにおりていく。何か左官屋さんの壁塗りを、最初から見せられているような錯覚に陥ってしまう。

化粧に没頭している女性からは、私の周りに立ち入らないで、これは私のプライベート空間よ、というオーラのような力を感じる。そして、周囲の人びとも、彼女の化粧に何の関心も示さず、気にもしない。周りに視線をめぐらせることなく、ただスマホの画面に向き合い、スマホというメディアを駆使し、自らの世界に立ち入らないでというオーラを放っている。

他にも、目を閉じ、眠っているような人、雑誌や本を読んでいる人、スマホを片手に音楽を聴き、外界と自分を遮断している人、等々――場や空間を他者と共有していながら、他者との交信になんらかのかたちで距離をとっているのだということを周囲に示し、自分のプライベートな世界へ閉じこもろうとする人びとの姿がある。

私たちはこうした光景にもう慣れっこになっていて、とくに驚きはないかもしれない。しかし、日常での他者との出会いやつながりを考えると、やはり驚かざるを得ないのだ。[e]なぜ私たちはこんなふうになってしまっているのだろうかと。 Ⅲ

「電車で化粧はやめなはれ」という歌をご存じだろうか。ＮＨＫ・Ｅテレの「０６５５（ゼロロクゴーゴー）」「２３５５（ニーサンゴーゴー）」という一日の始まりと終わりの五分間を知らせる番組で、たまに歌われているものだ。漫才コンビのブラックマヨネーズが女装し、コミカルに踊りながら「電車で化粧はやめなはれ」と歌う。電車で化粧をしていれば、その間延びした表情が周囲

に見られるし、かっこ悪いやないか、化粧は家か化粧室でするもので、あと少し早く起きたら自宅で化粧ができるのに、といった内容だ。

最初に歌い踊るブラマヨを見た瞬間、思わずふきだした。ＮＨＫもようやるなぁと、妙に納得したのだ。

電車という移動空間。そこはかつてどのような意味をもっていたのか。私がこれまでの人生で身につけてきた常識的な感覚からいえば、電車の車内は公共の場であり、少なくともそこでやってはいけない行為があったし、またできるだけやらないほうがいい行為もあった。はっきりしているのは、そこはプライベートな空間ではなかったということだ。化粧という営みは、プライベートな空間でなされるべきものであり、電車には、化粧が済んだ――〝公の場に示してもいいという意味に満ちた〟顔や姿の人間が乗るものだ。

しかし、最近の電車での「あたりまえ」な光景を見ていると、「車内」という意味が確実に変容しつつあることがわかる。

A　という私の感覚も、こうした車内の日常的光景に馴らされていくにつれ、微妙に変化していく。

通勤・通学電車の「車内」という空間は、私的空間が隣接して成立している空間ではないが、公共的空間でもなくなってしまったのだろう。すでに公―私、パブリック―プライベートで分けられるものではなくなっているのかもしれない。それは職場や学校という、まさに公共の空間に移動するために通過していく遷移的な意味の空間――公と私のグレーゾーン――公から私へと意味がグラデーションしていく空間なのだろうか。

「電車で化粧をすること」の是非など、大したことではないかもしれない。ある学生のレポートでは、「別に他の乗客の邪魔をしているわけでもないし、迷惑でもない、むしろ揺れる車内で見事に化粧をするその技に驚く」と書かれていた。「酔っ払って他の乗客にからんだりする中年男性のほうがよほど車内の秩序を乱している」とも。

なるほど、その通りだ、と思う。

ただ私がここで問題にしたいのは、迷惑の中身ではない。車内という空間で、人びとが互いの行為や所作を、いかにして「見ないこと」「気がつかないこと」として振る舞い、互いの関係性の間に、緩衝材とでもいえる「距離」を保持しているのかという現

実である。

Ⅳ

端的にいえば、車内では、たまたま乗り合わせた他者を理解する必要はないし、理解しようとする営みを過剰に見せれば、逆にそれが「例外」で「異常」だと見なされるだろう。

普段、私たちは見知らぬ他者とまっすぐ向き合う必要はないし、他者をトータルに理解する必要もない。なぜならそうした他者理解には、さまざまなリスクがともなうからだ。

他者を理解するというリスクとはなんだろうか。

それは、[f]私がこれまで生きるなかで貯めてきた「経験知(値)」が守備できる範囲を軽々と超えた意味世界を生きている他者としてのあなたや彼らとの出会いがもたらす衝撃である。

私たちは多くの場合、他者とそんなに深く出会う必要もないし、関わる必要もない。とりあえずその場をやりすごすことができる程度の意味が詰まっている「類型」として、目の前の他者に向き合えば十分だろう。

しかし、私たちは往々にして、[g]こうした粗い意味をまとった類型としてではなく、もっと意味が満ち、その意味が目の前の存在を超えて果てしなく広がっているような他者と出会ってしまう。このようなとき、粗い意味をまとった類型やこれまで獲得してきた「経験知(値)」は、何の役にも立たない。

そのとき、私は他者にどのように向き合えばいいのだろうか。

たとえば、その他者とは、何かの社会問題に苦悩し、克服しようと生きている存在であったり、明らかな「〇〇問題」を生きていないにしても、拒食や過食といった、本人に由来することのない問題経験といえるような「生きづらさ」と葛藤している存在であったりする。

そのとき、私は、その他者をどのように理解しようとすればいいのだろうか。

世間では、不治の病を生きる相手との恋愛ストーリーが何度もかたちを変えて享受されているように、純粋で透明なかたちの出会いやつながりこそ、美しくすばらしいものだという価値観が流布されている。他者とつながるには、その異質性を超越する

「純粋さ」が必要なのだというメッセージである。

このメッセージは、なかなか否定しがたい力をもつ。

しかしはたして、そのような「純粋な」つながりだけが、異質な他者を理解するというリスクを乗り越えるために必要な、唯一の手がかりであり、力なのだろうか。

私はそうは思わない。確かに「純粋さ」は美しく、ときに力強いものだろう。しかし私たちは日常において、自らのすべてを剥(む)きだしにして、相手に向かうのではない。私たちはすでにさまざまなかたちや方法で、自らが何者であるか、どのような問題を生きているのか、いかなる「生きづらさ」に向き合っているかなど、自分の生きる姿を考える「術(すべ)」をもっているし、他者とどのように向き合えばいいのかの「処方」ももっている。

私たちは、こうした「術」や「処方」を駆使しつつ生きている他者と出会い、他者を理解しようとする。とすれば、いきなり「純粋さ」で相手と対峙するなど、容易なことではない。

いわば何重にもなっている他者の殻を一枚一枚はがしながら、その異質さと少しずつ出会っていくという、けっこう時間のかかるリスクが、私の前に開けてくるはずだ。

とすれば、相手の「術」や「処方」を克明にみつめ、それが私に与える影響や力をよく了解しながら、他者がもつ異質さへと接近していくという、地道かつ細やかな営みが求められる。 V

それがリスクに対処するということであり、この営みを重ねる過程で、異質な他者と B 関係性を築ける可能性が開けてくるのではないだろうか。

そして、異質な他者と出会い、向き合い、彼らを理解するというリスクが立ち現われてくる場こそ、私たちが粗い意味をまとった類型的知を駆使し、多くの場合、他者と適当な距離をとりながら関係を維持しつつ「あたりまえ」に生きている日常生活世界なのである。

（好井裕明『違和感から始まる社会学　日常性のフィールドワークへの招待』による）

〈注〉 シュッツ…アルフレッド・シュッツ(Alfred Schütz　1899～1959)。オーストリア出身の社会学者。

問一　傍線a「いま、ここ」について筆者が述べていることとして当てはまらないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　「いま、ここ」は、他者であるあなたと私が直接対面し、交信する、コミュニケーションのゼロ点である。
2　「いま、ここ」は、多様な位相や次元を生きる異質な他者と私が出会い、つながる、力に満ちた場である。
3　「いま、ここ」は、他者の背後に広がる無限の生活世界が、次から次へと充実した意味を創造する世界である。
4　「いま、ここ」は、私を中心として広がる「あたりまえ」の生活世界の意味を反省し、問い直す原点である。
5　「いま、ここ」は、私が他者のすべてを感じ取り、また他者に自分を理解してもらう可能性に満ちた場である。

問二　傍線b「「いま、ここ」で私があなたと出会うこと、向き合うことは、決定的に重要なのである」とあるが、なぜ重要なのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　あなたとの「いま、ここ」での対面は、過去や未来から切り離された、今のあなただけを見つめることであり、それがあなたとのつながりの基本となるから。
2　「いま、ここ」は刻々と移っていくものであり、「いま、ここ」で創出されるあなたと私のつながりも常に更新され、あなたへの理解が終わることはないから。
3　「いま、ここ」であなたと出会い、常に移りゆく「いま、ここ」を積み重ねることによって、過去や未来にとらわれず、いまのあなたを理解することができるから。
4　たとえ、これまでのつながりからあなたを理解することができたとしても、「いま、ここ」であなたと向き合わなければ、あなたと真につながることはできないから。
5　あなたと「いま、ここ」で出会うことは、眼前の世界にいるあなたを理解することだけでなく、背後に広がる全き存在としてのあなたとつながる手がかりになるから。

問三　傍線c「私たちが「あたりまえ」に生きている日常を、どのように見直すことができるのだろうか」とあるが、筆者がここで述べている「「あたりまえ」に生きている日常を見直す」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　普段は気づかぬふりをして、一定の距離を保っている日常の現象や問題に着目し、その問題の背景について考えてみるということ。

2　日常生活の中に隠れている衝撃的な非日常を探し出し、それが「あたりまえ」だと認識されるに至った要因を洗い出すということ。

3　慣れっこになってしまった日常の光景を批判的に見つめ、そこに潜む問題を特定し、問題の深刻さを社会に問いかけるということ。

4　私たちが普段生きている日常生活世界を自明の現象として受け流すのではなく、そこに潜む意味を改めて探究してみるということ。

5　「あたりまえ」だと思って見過ごしてきたことが、実は変化しているということに気づき、今後の成り行きを見つめるということ。

問四　傍線d「車内での人びとの様子をそれとなく観察するのだが、なかなか興味深いものがあった」とあるが、どのような点が興味深いのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　乗客同士が他者との間に距離を保持することがあたりまえになり、車内という空間の意味が変化してきている点。
2　細かく揺れる車内で化粧に没頭している女性が、上手に道具を使い、私的な顔から公的な顔へと変わっていく点。
3　周囲の人々が、化粧をしている女性には関心を示さず、スマホというメディアだけで外界とつながろうとしている点。
4　電車で化粧をすることは、酔っ払って他の乗客にからむ行為と違って迷惑の程度は低いのに他者に不快感を与える点。
5　乗客の多くが化粧をする女性をあたりまえな光景の一部と捉え、振り返ることなく無意識の底に沈み込もうとしている点。

問五　空欄 A に入る文として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　「もはやパブリックな場ではないのだろうなぁ」
2　「公と私が交わる接点であるべきなのだがなぁ」
3　「公共的な意味が満ちた空間のはずなのだがなぁ」
4　「いずれ完全に私的空間と化していくのだろうなぁ」
5　「プライベートな行為が許容されてもいいのになぁ」

問六　傍線f「私がこれまで生きるなかで貯めてきた「経験知(値)」が守備できる」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　目の前の他者は、タイプ別に分類すると、異質な部類に入るが、経験者の知恵を借りれば、危険を回避することができるということ。

2　目の前の他者は、これまでの経験や知識では対処できない特殊な他者ではなく、既知のタイプに位置づけて、対処できるということ。

3　目の前の他者は、これまで深く関わらずに距離を保ってきたタイプだが、これまでの知識を使えば、深くつきあっていけるということ。

4　目の前の他者は、これまでの人生経験の中で関わったことがないタイプだが、多少のリスクを覚悟すれば、何とか向き合えるということ。

5　目の前の他者は、明らかに異質なタイプではあるものの、プライベートな空間に侵入してこないように注意すれば、無視できるということ。

問七　傍線g「こうした粗い意味をまとった類型としてではなく、もっと意味が満ち、その意味が目の前の存在を超えて果てしなく広がっているような他者と出会って」しまったとき、どのように向き合えばいいと筆者は述べているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　類型的知で対処できない他者が自分の殻に閉じこもっていたら、これまでの「術」や「処方」を駆使してリスクを回避し、その場をやり過ごせばいい。

2　異質な他者と向き合うことによって起こるリスクを理解し、他者との距離を一定に保ちながら、他者の言葉や感情、表情や動作を傍観し続ければいい。

3　「生きづらさ」に苦悩している他者がどのような問題に直面しているかを、類型的知に基づいて詳細に分析し、客観的な視点から解決の方法を探し出せばいい。

4　異質な他者を理解するには、「経験知(値)」は役に立たないということを理解した上で、他者の「術」や「処方」がどのように異質であるかを徐々に理解すればいい。

5　目の前の他者がどのような「術」や「処方」を駆使して、今を生きているかをじっくりと観察することで、少しずつ他者の背後にある問題や現実を読み解いていけばいい。

問八　空欄 B に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　より純粋で強固な

2　より客観的で冷静な

3　より緊密で類型的な

4　より現実的で豊かな

5　より透明で無意識的な

問九　本文中からは次の一文が脱落している。入るべき箇所は、本文中の Ⅰ ～ Ⅴ のどこか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その番号をマークせよ。

こうした、いわば単純な事実こそ、「いま、ここ」で私があなたと充実した意味を創造するための基本なのである。

1　Ⅰ　　2　Ⅱ　　3　Ⅲ　　4　Ⅳ　　5　Ⅴ

問十　傍線 e「なぜ私たちはこんなふうになってしまっているのだろうか」とあるが、私たちがどんなふうになっていると筆者は考えているのか。本文の内容に即して五十字以内(句読点を含む)で説明せよ。

(二)

次の文章を読み、後の問に答えよ。

ハッタと相手を睨(にら)みつける、という言葉が死語になって久しい。上下の唇を真一文字に引きしめ、まなじりを決して睨みつける振舞いが、もうどこにもみられない。

歌舞伎の世界では、初代の市川団十郎が編みだしたといわれる「不動の見得(イ)」という荒事(あらごと)の所作が知られているが、あれは憤怒[1]の姿をあらわす不動明王の、周囲を圧して睨みつける表情をモデルにしたものだった。市川家はもともと成田山の不動尊と深い関係にあり、屋号を成田屋というのもそこからきている。

相撲の土俵でも、立ち合い前の両力士が両手両腕を下ろし、面をあげてじっと相手を睨みつける。その作法が緊張感を高める上でも、様式美としての相撲の迫力を演出する上でも欠かせない。このあいだの本場所でも、優勝こそのがしてしまったけれども、横綱白鵬[2]の睨みの表情はいつも通り野性味を帯びて輝いていた。それだからこそであろう、敗れたとき[3]の破顔一笑が見ているものの心をなごませる。だがその睨みの表情は、われわれの日常生活のなかからはもう失われてしまっているのではないだろうか。

周囲を見廻すと、いつごろからか手のこんだ詐欺事件が続発するようになっている。結婚詐欺、振り込め詐欺をはじめとして世間を騒がせていることは周知の事実だ。それが殺害事件に発展したり、児童の誘拐や虐待などの事件とダブって報道されるようになった。マスメディアが流す過大な情報とも入り混って、われわれの不安感をいっそう増大させている。その不安の根源をさぐっていくと、結局、

人を信用するな
他人を信用するな

に行き着くのではないだろうか。かつてわれわれは、人を見たら泥棒と思え、と親からよくきかされたものだった。それがいつのまにか、人を見たら誘拐魔と思え、殺人鬼と思え、という時代に変わってしまった。もっとも、人を見たら泥棒と思え、というかつての親たちのいい分には冗談半分の口吻(こうふん)が漂っていたが、今日の親たちの心配には、そんな［A］はもはやみられない。そうであるから、今や

人を信用せよ
他人を信じよ

という声は、残念ながらどこからもきこえてはこない。家庭の親たちの口からもきこえてこない。学校の教師たちも、うっかりそれを言葉にすることができない。宗教家さえ確信をもって声に出していうことができなくなっているのではないか。

ジレンマである。つらいジレンマというほかはない。しかし、人を信ずるか、信じないか、というジレンマにみちた問いの前にあって、かねて私には胸の内に刻みつけていた情景があった。昔の村の子どもたちがよくやっていた行動である。その村に、見知らぬ子どもが訪ねてきたときの、一種のあいさつの行動である。それが「睨む」ということだった。

そう言ったのが民俗学者の柳田国男だった。村のガキ大将のようなのが、みたことのない者が村に闖入(ちんにゅう)しようとしているという通報をうけて、村境におっとり刀[a]でとんでいく。その外部からやってきた者の前に立ちはだかって、ハッタと睨みつける。汝(なんじ)はいったい何者か、という疑いの眼をいっぱいに見開いて、相手をギョウシ(ハ)する。闖入者の方も、何を負けじと、まなじりを決して睨み返す。その気迫[4]の勝負に合格すれば、村への通行を許す。合格しなければ、ただちに追い返す。一種の睨み合いの［B］である。しかし闖入者の方が思わず破顔一笑し、まいったといえば、そこで睨み合いの勝負が終わり、新たに交渉がはじまる。

他者にたいする知恵にみちたつき合い方といっていいだろう。[b]異邦人にたいする根元的なあいさつの仕方ということもでき

る。そのあいさつの方式がやがて子どもたちのあいだでゲーム化し、

5 睨めっこ遊び

になったのだ――そのようにさきの柳田国男は言っているのである。つまりこの睨む作法は、もともとは大人の社会におけるあいさつのやり方だった。それが子どもの世界に伝染し、ゲーム化して、「睨めっこ遊び」へと変化していったのだ。

ニ タンゼンと睨む。威厳のある態度で相手の眼をみすえる。それが「睨む」という精神の格闘技になっていった。その睨む精神が今日の大人からも子どもの世界からも失われて久しいのである。人を信ずるか、信じないか、のジレンマの前に立つとき、c われわれがまずもって考えておかなければならない重大な課題ではないかと思うのである。

（山折哲雄『危機と日本人』による）

問一　傍線イ、ロの読み方をひらがなで記せ。

問二　傍線ハ、ニのカタカナを漢字で記せ。

問三　波線部1～5のうち、人と対する時の精神のあり方が他と異なるものを一つ選び、その番号をマークせよ。

1　憤怒の姿をあらわす不動明王
2　横綱白鵬の睨みの表情
3　敗れたときの破顔一笑
4　気迫の勝負
5　睨めっこ遊び

問四　空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　面白み
2　心の余裕
3　本質を見通す力
4　危機感
5　あきらめの気持ち

問五　空欄 B に入る漢字三文字の言葉を本文中より抜き出せ。

問六　傍線a「おっとり刀で」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　のんびりとした様子で
2　悠然とした様子で
3　待ってましたとばかり
4　緊急事態だとばかり
5　どうなってもよいとばかり

問七　傍線b「異邦人にたいする根元的なあいさつの仕方」の内容の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　外の社会から入ってくる者に対して、みずからの社会の威厳を示すとともに、相手がどのような者であるかを厳しく確かめようとするやりとり。
2　外の社会から入ってくる者に対して、内の社会との違いを厳しく認識させ、仲良くすることを約束させた上で、仲間に迎え入れていこうとするやりとり。
3　外の社会から入ってくる者に対して、はじめは深い疑いの気持ちを持って接し、最終的には仲間に迎え入れていこうとするやりとり。
4　外の社会から入ってくる者に対して、その力がどの程度のものかを試して、自らの力の優位を認めさせようとするやりとり。
5　外の社会から入ってくる者と内の社会の者とが、厳しく睨み合う勝負を持続させることで、お互いへの敬意を高め合っていこうとするやりとり。

問八　傍線c「われわれがまずもって考えておかなければならない重大な課題」の説明として最も適切なものを一つ選び、その番号をマークせよ。

1　睨めっこ遊びとしてゲーム化してしまった睨む精神を、力あるものに復活させていかなければいけないということ。

2　大人の社会では当たり前の、威厳のある態度で相手を睨むことを、こどもの世界にも及ぼさなければいけないということ。

3　人を信じてはいけないと子どもに教えている現実を反省し、人を信じることの大切さを社会に広めていかなければいけないということ。

4　かつては大人の社会でも子どもの世界でも重要な役割を果たしていた、睨む精神が失われていることを認識しなければいけないということ。

5　詐欺や誘拐・虐待などが頻発し、人を信じることができなくなった社会から、人を信じる社会に戻すために、あいさつを復活させなければいけないということ。

（三）

次の文章を読み、後の問に答えよ。

こぞの夏、竹植うる日のころ、うき節茂きうき世に生まれたる娘、おろかにしてものにさとかれとて、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあはは、天窓てんてん、かぶりかぶりふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、露程の執念なく、ただちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつつ、それもただちに倦きて、障子のうす紙をめりめりむしるに、「よくしたよくした」とほむれば誠と思ひ、［A］と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一点の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なかなか心の皺を伸しぬ。又、人の来りて、「わんわんはどこに」といへば犬に指し、「かあかあは」と問へば烏にゆびさすさま、口もとより爪先迄、愛敬こぼれてあいらしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るるよりもやさしくなん覚え侍る。

此をさな、仏の守りし給ひけん、迨夜の夕暮に、持仏堂に蝋燭てらして鈴打ちならせば、どこに居てもいそがはしく這ひよりて、1さわらびのちひさき手を合せて「なんむなんむ」と唱ふ声、しをらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝也。それにつけても、おのれかしらには2いくらの霜をいただき、額にはしわしわ波の寄せ来る齢にて、弥陀たのむすべもしらで、うかうか月日を費すこそ、二つ子の手前もはづかしけれと思ふも、其坐を退けば、はや地獄の種を蒔きて、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつつ、剰、仏のいましめし酒を呑む。

折から門に月さして、いと涼しく、外に3わらはべの踊の声のすれば、ただちに小椀投捨てて、片ゐざりにゐざり出て、声を上げ手真似して、うれしげなるを見るにつけつつ、いつしか、かれをもふり分髪のたけになして、をどらせて見たらんには、廿五菩薩の管弦よりも、はるかまさりて興あるわざならんと、我身につもる老を忘れて、うさをなんはらしける。

かく日すがら、をじかの角のつかの間も、手足をうごかさずといふ事なくて、遊びつかれる物から、朝は日のたける迄眠る。其うちばかり母は正月と思ひ、飯焚き、そこら掃きかたづけて、団扇［B］汗をさまして、閨に泣声のするを目の覚むる相

図とさだめ、手かしこく抱き起して、うらの畠の尿(しと)やりて、乳房あてがへば、C 吸ひながら、[4]むな板のあたりを打ちたたきて、にこにこ笑ひ顔を作るに、母は長々[5]胎内のくるしびも、日々襁褓(むつき)の穢(きたな)らしきも、ほとほと忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、なでさすりて、一入(ひとしほ)よろこぶありさまなりけらし。

蚤の迹(あと)かぞへながらに添乳(そへちち)かな　一茶

（小林一茶『おらが春』による）

〈注〉

竹植うる日……陰暦五月十三日。この日に竹を植えるとよく根付くという。

迹なき俳優……比類のない演技。

迨夜……逮夜。亡くなった人の忌日の前夜。

持仏堂……ここでは、家の中の仏間、または仏壇のこと。

其坐……礼拝の座。

片ゐざり……片膝を立ててすり歩くこと。

廿五菩薩……念仏行者が往生する際には、廿五菩薩が紫雲に乗って来迎するとされる。

正月……ここでは、一日のうちで息抜きのできるとき、の意。

衣のうらの玉……無上の宝の意。人が本来そなわっている仏性に気付かないのは、衣服の中に縫い込まれた宝珠を知らずに貧を嘆くのと同じ、という法華経に見える譬(たと)えによる。

問一　傍線a「とみに」とほぼ同じ意味の四文字の言葉を文中より抜き出せ。

問二　空欄 A ～ C にそれぞれ入る最も適切な語を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。ただし、同じ語を二回以上選ばないこと。

1　ひらひら　　2　ふくふく　　3　きやらきやら　　4　ひたひた　　5　すはすは

問三　傍線b「やさしく」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　はずかしく
2　優美に
3　けなげに
4　つつましやかに
5　思いやり深く

問四　傍線イ「娘」、ロ「さと」、ハ「子ども」、ニ「をさな」、ホ「二つ子」の中で、一つだけ違う人物を指すものがある。それはどれか。次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　イ「娘」　　2　ロ「さと」　　3　ハ「子ども」　　4　ニ「をさな」　　5　ホ「二つ子」

問五　傍線c「地獄の種」となる行為、即ち地獄に堕ちる原因となる罪の行為を具体的に記述している部分を抜き出し、その最初と最後の三字(句読点を含む)ずつを記せ。

問六　傍線d「をじかの角の」と同じ修辞法のものを、波線1～5の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　さわらびの　　2　いくらの　　3　わらはべの　　4　むな板の　　5　胎内の

問七　傍線あ「いつしか、かれをもふり分髪のたけになして、をどらせて見たらんには、廿五菩薩の管弦よりも、はるかまさりて興あるわざならん」の部分から読み取れる筆者の心情として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　娘の背丈が伸びて踊るとしたら、自分も楽器を演奏して一緒に楽しめるだろう。
2　娘が成長して踊るとしたら、それは非常に心を慰めてくれるものになるだろう。
3　娘が将来着飾って音楽を演奏するとしたら、それは仏の姿よりも霊妙であろう。
4　娘が成人して踊を披露してくれるとしたら、自分はどんなに幸せなことだろう。
5　娘の成長は楽しみで仕方がないが、自分はただ老いて行くだけなのであろうか。

問八　本文最後にある俳句「蚤の迹かぞへながらに添乳哉」を詠んだ筆者の気持ちの説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1　貧しい日々の生活に耐えられない気持ち
2　家族に病気の絶えないことを嘆く気持ち
3　娘の成長をとても楽しみに思う気持ち
4　娘の育児に追われる妻をねぎらう気持ち
5　家族との幸せな日々に満足する気持ち

問九　次の句の中から一茶の句でないものを一つ選び、その番号をマークせよ。

1　これがまあつひのすみかか雪五尺
2　名月を取つてくれろと泣く子かな
3　ともかくもあなた任せの年の暮れ
4　露の世は露の世ながらさりながら
5　蚤虱馬の尿する枕もと